



蝦夷草紙
附録 漂民談 北

ル 4
327
4



門九呂
327
4

異國船漂着之事

カムサスカと云ふ國者名シヤ國の地陸て東方の大
 端之船と云ふ元日本國の蝦夷地也云ふ者
 シヤ國の曆元一千六百四十七年其到りて他國の玉人
 コウフルト云々此地不到りて初て見之死に云々所
 日本天照丙午年云々乃んて一百四十七年云々其後
 カムサスカ國云々名シヤ國云々依從せし日本享保
 年間云々其國何れ云々分今到りて船此以公東
 蝦夷地島々の東海をセイウエルヲ、ストシウ云

とを付西海をへんじユシモヲシヤウトを付より其後
官船陸乗しつて其業を初と奉ぜ之此へんじユシ
モウシヤウへちもつ大向ありけり是は大港也
ヲボツカトソ日本享保年間小奥州南に依井
所商人竹内徳也といふ若し澤をせし是を亦小
海之極カムサスカとヲボツカの間北に遠きにセシ
シスコイセカアアカトソ所あり此所小開業の今余
を住居長はる。在遠の官人母アウスといふ者有
しか赤人の王都小運送の租税の是を物を積た

官船陸乗しつて此セガアカカの泊所碇宿せり此所
彼ヲウス課中を以て租籍小及び此所を母は官
船を乗来ぬ直小此港を関航して東蝦夷地
の内しモシリ。此所碇宿して凡使を宿給ひ序互
の内船の商人の内イウコイロフを石器量之とけ
此所控より頂風を治りけり此所を在帆して日本の
東洋を陸海し四國の東南に到り碇宿して脚
舟を下し上陸せぬ。阿比國之國主小注進とて
有司あり是を政ふ小異國船をぬ。此所碇宿せり

積糸新氷を給り此所を五帆一南洋不涉海
一印度の南洋を涉海西洋不涉海一歐羅巴
列の内バチリイと不周不着船して中國トイナ
コ依たることり一明和八年異國船自列難を
涉海上総の異を歴流して阿波國不歴を
とてしつゝ船あり付後ハアウスカ涉海せし
思ひてくさく此船中の大勢は阿波の國を
のちて不依て身命を合し悔をさす事を行
とける志難くして累年日中不返海の
阿南地高船何果不トイナ國分書翰を何つ
ひしふ因り物伝り其時の長船奉行何果是
を從て付旨集来達一令命何りて通船何果
翻譯をれハ阿波の玉々礼章之船以の志は
てウグアラタルシンゴロミヤ者之とてりアウ
スセカアツカの巻舟於て赤人國の友船を棄
し阿不其船以イウコイロフバセロウとてし人
居りしイウコイロウはアウスカ復籍横
領を不制と又ハセロウは蝦夷地を以て

日本國の東海を航し海軍を率ふる王命を以て
所てこれに形なきの母を以て流るる帆を以て
飄るる氷を以て航して人爲るにモシリ
破るる時不アウストイロウ國痛つり
流るるイロウコイロウを以て海を以てお帆せり
よりイロウコイロウはにモシリ流るる土人子女抱ふ
如國不悔りてより時を以て洋小王都を率
るる忠義を以て艱難を以て一命感愛の集
るる海を以てより又ハセロチはアウスロ根

藉を國家の大義を以て堪へて東洋南
洋西洋を以て海を以て國小は善徳を以て
海を以て率英雄を以て是を以て應るるを以て
よりイロウコイロウはにモシリ彼國はに西家不
大業を以て成るるにハセロチはにモシリ又日本
河海を以て國小は善徳を以て海を以て率
小業を以て成るるにハセロチはにモシリ又日本
事と以て又アウスを以て率大業を以て成るる
有るにモシリ遊子よりと口しやと合戦を

この時よりシマ國大將軍ハ此アウスよりホリシヤ
幣を破してアウス屬とめて日本屬の
蝦夷地の北方海上迄不隔てセシホイウイセロア
フカホを遷せり以時よりホリシマ國とキユーウ國
の二國國ヲヨシマ國ニ依從せりとより高今帝
バリヨベツトロイシユ天明丙午年三十二此又帝
ガクアラリセイシユ母帝イカテリナアリキセ
ウナ付親子英雄賢德の人相よりより彼を
法度より一代ハ男帝一代ハ女帝と稱式も信不

つとより今より天下萬國セは古ヤ
國不屬一三ハ本屬と其勢カ破作の如くと
不親を以て不審かりしが予彼イシユヨ
不親西より其説の眞疑を以て不審節
を合してつめくして疑惑氷の如く解いたる
叔バセロチフはアウスとホリシヤ同船して日本屬の
蝦夷地の北日本東洋を涉海せしハ海路里
程地理方位を見探る為計略ならハ所不
於測量せし事風説考も是たハ向も

念入してイシユヨ小舟めくふ是又蔚節を念
くつかぬ一是皆ハセロチフトアウスカ後條小國
所く其以後赤人東洋の内は此の及乃及蝦夷
地乃至日本國海路の里程地理方位等尚
未あゆみ未なりし見ゆ又アウスは今ふあまを
フランス國のハテリイといふ所の國王少使賜せられ
世をを窺ふくより予例のち船渡すの阿蘭
陀船師トイテ國を送りし地圖の正寫一を
授ふ日本國の四海を悉く記し松本のアサン
といふ船心の煙土所を載せしを見たり船
心なる記事と見たりし

カラプト鴻の事

松前所在の西蝦夷地ソウヤといふ本有叶ソウ
ヤを和帆とて海上十里を隔海くカラフト島
の内シラヌといふ処より此シラヌといふ西ノ島
曰島の内ナヨといふ所不到る此島の沖中トト
してといふ島有けはカラフト島は僅小海上七
里を隔とよりナヨといふ西ノ島は傳ふありて

ヲホトてりといふ所ありし時所はたふ山岳の峻
阿りて風波も凄れ安き所きて既程遠くして
港も溜りたる所又てヲホトてり西京遠く
ありナヨロウといふ所ありハ涯ハ遠く
濱も砂地みて丘陵ハ平くハ之時所ハ大河あり
蝦夷舟より舟より河上京海軍数日の舟路之
しよけきの地中溪間曠野事と見たり此河
の海の河口み大船の泊りも宜し切るなり同路
しラ又しハけ不き海に格別備置たり元々白

船の舟路之其遠路之百室小のふけりナヨロウ
ハ一日路西京ありクスリナイといふ所をけ所ハ
河上河上てり路をたてて他河へ毎年舟
到れハ堅氷出でて陸地のところ此期を候ハ堅
氷の上を渡り山を越峰あり物一日路西京の地
タライカといふ処に到るといふ是迄及るハケスリ
ナイハ西京のより小舟ありナヨロウといふ所を到る
ハ既程遠く地人も多く山舟も今ハ海へ出
ありて遠くあるといふナヨロウハけナヨロウ

舟路九十有餘海上凡一百餘里之此処は西より一日路
の舟ありてナウカウといふ所有は此の山舟國よ
は海濱あり海上凡十里を隔此の舟は冬申小
いれは堅氷張りて陸地の如く一舟も到れ
大少橈を牽せて通りぬるべし又此の舟は
近を西カラフトといふ又此の舟は東はウルト
といふ大川有是は東京ノシカマナイといふあり
此の舟も大川有此河上土地ありて蝦夷船より土人
逐海へ運送を達せしり此のシカマナイの東
は京ノシトコといふ処ありて新海存分仲の方あり
山岳ありしは又此の在ノト口迄分けるは近蝦夷
土人多く徘徊し産物小力を産出せしり又
日向西の地スライカといふ所ハ西より一の程
昌の新地是は山奥小チクカカといふ所ありて新
小蝦夷土人多く住居する大村あり蝦夷地は稀
なる山中小村民ありて日向地より土産物多し地
産物と云ふは又スライカハ西より分けるは
また蝦夷土人住宅もあつて之より依りて近海の

土人も少く有る産物も物産をとりけ道を北カラ
フトとす。物又け島の風土は松前所在島のま
俊山等一き土地ととり少極あ度四十六度
分四十九度。いゝと土人の産業獲物ソウヤ
少と見たりソウヤ、運送一山舟ふを記ハ山舟ふ
運送一く交易するハ風俗も山舟ふ交易する
少ハ山舟風俗も移りソウヤ、交易する土人は
日本蝦夷土人の俗ととりけ土地の風俗も家
毎小大を教多、飢を其申ハ舟の細くを事

つを申ハ様をいせ大を供り事半馬の如く
すも申事、向々逆稱も不足と稱はれハ
其飼をとり大をわの食事少達とす之時
の産物事、松前所在島の物とす大は之
日本國ハ遠大にあり、松前所在島とカラ
フトと記すくハ九日申ハ三指信も近所あり

山舟國の事

天明丙午年無録ハ大石逸平より著る予ハ旧
友ありカラフト信のヲホトたりといふ所不到し

え中
遠大と云

をらむ付見山申を八台社見漸く廣見溪間不
出也ハ大河河を付大河母階ひて河上ホ一日セリ
ホウハとふ池不到る以地を少船舟々有る格見
及了岩を副て漕き出りてキニキハツツソ所
不也此キニキハツは山丹國中の繁昌の地とて
土人多也新くも人忌蝦夷土人不也と一まゝ人相
之付キニキハツを若又池の涯不はき遠格き
及了事一り路行はてンカウとふ大河不也。
以所を元ニキハツ後漸く満州のヤウキツワシ

とふ山國不也付所不也山丹人とも日本出生を
の鐵銅類錫鉛釘等の下金或ハ麴皮
黏皮^{テシ}れを物おく満州人たが蝦夷綿と云衣
青絨等物おく交易一々ゆり松前所
在爲の内ソウヤもて度海一又日本玉の産を
と交易もと山丹人ヤウキツワニ母到也六門
外少旅館ありて是不遠也は門内不入るを
制其其も事もて歳一旅館を玉王分の送
他と一りまゝ旅館の出入も不困也事不

許なり

山丹國之言語

音王^チ 酒ハラキ弓てニシ^シ 炭^チヤツチ火^タタチ

煙^カニヤ 船^ウニヤ海^ナモ 糸^ネブリ新^シモウ

波^ワタ 梳^シニヤ一^イモウニ^ニタタ三^{サン}ニヤフホ

四^シニヤ五^ゴツチヤ六^{ロク}ニウセ^セツイハ^ハリ九^クホイ十^{ジュウ}ツア

文字あく口伝くの國語をてやそり日本の蝦夷
のそのめくもて何の指とよする所をわたり

日本人カラフト島不慮之事

松前家日記酒屋流の介由留書を視る不務州
西のまの船に徳五郎と云ふ船風小遇い屋流
してカラフト島不慮之は時不宝曆十二年六月
廿百之船に徳五郎何國と云ふは只志死と
て日天を名にのし船日進島中島宵翔を視
新不野と云ふ島島の長己の方位をたて飛
ゆくを見ず船は日中不船細きる島毎
年秋不は集る島は長己の方位小日本有
一と云ひ又十八日を度て人里有此時九月

十八日付所ハ蝦夷地ニラヌしと云村之付亦既ハ
吾降よりと見たり予竊少考ふコカラフト
乃の内タライカとナワキしよのリス澤とせし
乃らりし此来をハ察し日中船師の手懸を推
量せし一乃の産天ぬり此アらる一木又天明
丙午年夏大石逸平よりカカラフト此地
方廣捷遠近のハ諸王を人拘等の檢ふの
為不後海一後進はくハ後と巡檢はる不當日
村不到る怨のしるの名ヤエニコロパイと云此者の
父の名はヤウチウテイと云ら死去しと降ヤエ
ニコパイノしるをよる父のヤウチウテイは山
毛後海一又相前所を乃西蝦夷地ソウヤ
村不後海一交易を傳くせしとのえし先
山丹毛不後海一昨不滿州の官人今も居り
ヤウチウテイと云るを授けたりと云り其
官人ハ三仇の讒を獻する官彼をえする人
と云り安永七内村相前家長云るはた
上野役者ソウヤに往たり時不彼のヤウ

地校
此校
字

千ウテイ交易の爲ソウヤ村ホヤリ居るを
工屋匠を以て般夫人の名を世々するの御尋ね
小指書小揚忠貞と書くる夜紙の二軸を以
より居居つけ給ふを見て山丹カラフトの五箇
の程を不依く山丹國の地名を書記せられ
大少嶋の古名新西一ノリイチヤホツトス
ムリタムルバトスロキヤトシリ以よ古給く所を
の禮ハ洋而も此も然識者の地校を
多川又松糸の主人山田之長と云者通辞ソウ
ヤウ行する時カラフト給の主人の世々たる書
跡の一軸を予給送せしめ其書は日本の
に社の産有り似たりといふ大字を小字とて書
記せし物より大字ハ指書して小字ハ鑿書
字解めて上と中と下とに之を分年印を居
る物とて予推量し給不胡解國の
漢文なりんるらるる満洲山丹也漢文
を用ゆるとり日本國のいろはの御給物
て假名なり

蝦夷尊帝終 于所寬政三庚申歲閏四月早

蝦夷乱紀事

通判島崎つね申

蝦夷島に王地座とてえ高し中島山舟と號する所の
人まあり上世の始計高し後近小島郡に老人化せり食
ふべき物あり必ありとて舟楫をなましとて友
見たりとて教の如く海中をわたりて小島上を渡りて
船の傍に出るをとりて食せりとてぬく化せりとて
今の如刺是之今の夷とてやとて彼老翁神とてハ
彼老翁を山宗とてせし今と船の居る如く必而復す
中之みの子孫せしとて世をぬきとて今とて言ふは

國府人少武田を席信彦 後平坊冷 好て可あふはれり

土地のものを好むよ上園掛山といふは御部を捕り

其後を好む守ふたは必の光る日中の風俗をよむ

其月の朝を好む村人の名をよむはるる王餘也の娘美入

み世守とふふ屋をよむはるる王餘也の娘美入

まゝふりふり好むはるる娘美入の娘美入の娘美入

ふあひて喰咽をよむはるる水の底をよむはるる

浮城をよむ其の事よむはるるを物あはれは真物を納ふ

ふ及然の皮ねの娘美入の娘美入の娘美入

好むはるる人倫の道をもよむはるるはるるはるる

正信彦の世代は孫坊民の孫坊民の孫坊民

三十八月よきよ國自任は娘美入の娘美入

お前少孫任は娘美入の娘美入の娘美入

来り恒もよむはるる娘美入の娘美入の娘美入

後知りし時 延慶十一年 東之山にここヤウとよむはるる

こヤウとよむはるる 又レヤウセントヨウ だげこく骨をよむ

カヤ人お合はるる娘美入の娘美入の娘美入

属をよむ子ヤウ川をよむはるる城郭を捕り娘美入の娘美入

喜かゝ物も物もあゝ朝もこゝ時をわいの方へ
しよぬる後地ふすねし山の中へ進みお創世の
のふはあゝ進むゝふ音もあふら及時方根をまひ
身をもあまめクニヌリ川をすけり得なるを陣
二陣ぬらう三陣ぬらう四陣ぬらう五陣ぬらう
神もゝと進む敵を退くゝクニヌリぬらう八の陣關
モウハワゝゝふあ山へ進む電もゝふら彼山へ押さ
味方より進み後地をまゝゝふら及地を掃ひて二陣ふ
見もあゝと進むたを渡りぬらう進出ゝ一人もあまふら村
五及ゝと進むゝ山の間を相追ゝおあゝ見もあゝ
あゝと進むたふ叶とやあひんこワカリ川山の中の
あの中ふと、山中のの元へぬらふたゝゝあゝ進むゝ
進む川へ進む進めや強もあゝ後ふすち人八たゝ
よあ進むゝ進むゝ山の中進むゝを退くたふ進むゝ
は我思ふぬとゝ進むゝを退くたふ進むゝを退く
の考もあゝ進むゝを退くたふ進むゝを退く
ンへと進むた行を陽進し音鎮四千人無く進むゝ向の
岩より進むゝを陽進し音鎮四千人無く進むゝ向の

く通列初をうきさく妙め何事申ひ彼母京路人
ひきあきまへとさうひひかきまう改地を舞ひあはさる
攀の月り押さぬまてきあう大音揚てさけふ
己未振相の属とて天の及びも顧るに歌任んま
あうりしるたの所を将相あひさる及用器を以て
て是とて連ひはらふ己未振相あまき奴京火入り水ふ
入りかゝるも悪く世に出しゆく海にひらきまて
と助た打殺さまふの所後之あまを離れ人ふ
ぬてまあふあひ某め何振ふはたあてま合を物か
及し尖ふは補せし母京も連ふ音抑をりしを形中
某うりけさあうえ於所敵ふ侍ん人やつとふ己未
射る希く氣日な人ふ立危きうまきま銃あを射
て減むへとまきふ胸板を叩くひりたり事をも
是をもふえりし物園の勢方ひふ島出し京に居るあ
の西勢方向ひしとあひふ各たふなきまけく海を投ま
櫛刀をぬきまきく音領臣中人毎た被ふあ母り海
人あめくまうたり控倉射面と神妙ふ事たり
自まつりあひ某りま人も殺す之をうけり場くあふ

くし和ぬし年細ひひのち中あゆみあかりて夜中
の食意あるなき神ふ侍ふと云ひしれは控らぬ有
しはあつ折ゆきよもあつて有りしころ後陣の多勢
し地味しこの勢いよく進みしをみるも不審し
とひしつて強ふをいふ言ふ角をとりて進出ぬた
ノスナハ捕追カテハウをいふ言ふ川沿て取て世せ
音をよむ 付書キルく控らぬを思ひ控をよまつていひ
ハたし根をいふ言ふりて音地あつ世を死たり 夜ぬて
後之レスナを斬追たりシヤクセウ足力ニ入シヤクセ
ウカをシシテカヒと云ひ其言をシラケシと云書ハ酒

醉師たも中不シラケヒをたふぬの付ぬめくの世之
しつ初るなき事と云ふく悟りし進まぬ味方の勢
既今全編少死しと云ふと重少打圍く時のあつと云く
チシテカヒ起方りく死ねども又死け出ハ村出たり
シヤクセンを起方り四方を死を見出く控らぬ我
をたもかりてと云ふ形なき控を飛ハカと云書不
自りく四方中りく村出たりを餘の首領未始未
ともハ中人村を少死火をとり控捕ふシヤクセカ
死敵をよむしつと云わりのあつと云書のあつ中余の

人共のりりり 御座りしをゆて 正長見たりし 正長見たりし 正長見たりし

押言世中の事天候の候なり 有久御りし

後殺りし味方し 御方よりシ又イをさるてゆん

世一あふじやうせうの老千余人海を言ひて退る

る味方をて退り大地をぬく 影ふお破りぬれ死の

たをさるてぬく 影ふお破りぬれ死の

方一御美の首領十人を生捕り ねあふりり

世一御美又西をる方より 病倍少なり日ぬき

少五人を侍たりし 御方より 御方より

ふ及りし 御美 御美 御美 御美 御美

御美 御美 御美 御美 御美 御美 御美

御美 御美 御美 御美 御美 御美 御美

御美 御美 御美 御美 御美 御美 御美

御美 御美 御美 御美 御美 御美 御美

御美 御美 御美 御美 御美 御美 御美

御美 御美 御美 御美 御美 御美 御美

御美 御美 御美 御美 御美 御美 御美

御美 御美 御美 御美 御美 御美 御美

御美 御美 御美 御美 御美 御美 御美

御美 御美 御美 御美 御美 御美 御美

御美 御美 御美 御美 御美 御美 御美

御美 御美 御美 御美 御美 御美 御美

御美 御美 御美 御美 御美 御美 御美

御美 御美 御美 御美 御美 御美 御美

御美 御美 御美 御美 御美 御美 御美

御美 御美 御美 御美 御美 御美 御美

御美 御美 御美 御美 御美 御美 御美

松何寺院
松何寺院
松何寺院
松何寺院
松何寺院

御供

御側象

主膳守

養儀守

遠江守

越中守

御上段

漂流人

床札

幸太丈
磯吉

御台
御台内上様

御納

破利留

御徒目附



寛政五年癸丑九月十日吹上御物見小松て去天

明年^{壬寅}二月十日百勢州白子を出船しそ夜駭

河沖より俄小大風きて吹放され日三年七月十日

魯靈者

魯西亜之
誤記

魯靈の属はアソカの子地、澤之、アカカサカ。

オホツカ、イルカウツカ、オホツカ、^{アソカ}歐羅巴洲

魯靈國に都、出女者不見て許しを定去也

九月、蝦夷の子、元口之地、彼より船を返りぬ

別神昌丸の船、^{大正}大正、又同水主、^{大正}大正、若を

上見たり、御物見の正画、御簾、^{大正}大正、透見

有後工御座を没く右方松平部中守加納遠守平定
更後守言井主殿正列坐于前進出を律律少納戸
頭志井後河守少野河内守多記水書院桂川甫周
列中是事由を守後出を言と令次は御所
中川部之命文部左五拜時受人方之執事や御座し
以後ハ御少姓たを少納戸群居セリ御白紙之庶批
子脚を居居五人し者為工没けある之相年し物工
作し幸を文族名をとら出幸を文齡四十二鬢を六
三の之能く後工たれあき痛く巻黒襪を

とてとてみ襟工ハ黄令く造りちひさき院
のまき物をとら批色ヒメ黄圍ヒメ見とけりある皆
神の升奪上をまきの衣紐を施一日織物袴を
忌一組地の線の下をを忌足白紙ヒメ莫大ヒメの上工
あきヒメ東西ヒメ深当体履きヒメ襪ヒメを突けり
袴去ハ齡十八同一次ハ鬢を組袴を文うとある
あきヒメ物を張る作をあるををまき取く脇
とらし組ヒメ哆囉ヒメ呢ヒメの升奪上張の衣紐を身ヒメ断系
又ハ袴ヒメ帷ヒメ上ヒメ忌ヒメ色ヒメをあるを文黄是間

通のて幾多織の袴を志仕白糸りや此の上は皆
をさし徳とれも製法ハ日一使や此を地
置ねを引て麻札の中一ある許實一此の
人は足之唇紅毛人の形一髪方髻帯たり又此
二人一問をとり答ふ本實怪すて聊一虚誕
か一誠一千古一奇事や

問 于方た定物志形さるる本何ヤ地

答 アシワカヤ木一はく漂志仕付忍一此年共
内食するも真の蘭シホムシ志百合の根を水

煮研し白酒くましく一若と好居出

共腮アキト一之平白糸一之平角一之西祥アキト一之甲に

一之舟之巻く軸の大サ一割り一之守をを

一之舟之巻く軸の大サ一割り一之守をを

一之舟之巻く軸の大サ一割り一之守をを

一之舟之巻く軸の大サ一割り一之守をを

一之舟之巻く軸の大サ一割り一之守をを

和蘭ニテ
之即青眼牙痛
ナリ一シケウルボ

一之即青眼牙痛
ナリ一シケウルボ

よみゆきも^しき^しを^しる^りに^し終^るに^し休^むる^にも^しり^て彼
地^に人^をし^て其^の成^りひ^をし^てし^てお^の道^をも^し古^の何^れも
日^中の^時に^も休^むる^に預^める^にも^しる^に而^も永^く川^にお^の休^むる^に
休^むる^に命^をを^つふ^るに^も彼^の氣^を、^も休^むる^に預^める^にも^しる^に
一^面の^時に^も中^にも^し女^帝の^所國^にも^し違^ふる^に
と^もの^にも^し出^るに^も身^を私^に入^る都^に、^もり^て帝^にも^し所^に
休^むる^に法^に中^にキ^リ口^をも^し旗^のの^音み^もも^し
其^の如^く女^帝に^もて^して^しも^しる^にも^しる^にも^しる^にも^しる^に
と^もの^にも^し出^るに^も身^を私^に入^る都^に、^もり^て帝^にも^し所^に

玉^の中^にも^した^るに^も官^女雲^にも^した^るに^も國^境休^むる^に
秘^にに^も休^むる^に預^める^に六^の四^を中^にも^しる^に官^人も^し
を^もも^しる^に女^帝の^所前^にに^も伴^ひも^しる^にも^しる^に
休^むる^にも^しる^にも^しる^にも^しる^にも^しる^にも^しる^に
を^もも^しる^にも^しる^にも^しる^にも^しる^にも^しる^にも^しる^に
休^むる^にも^しる^にも^しる^にも^しる^にも^しる^にも^しる^に
一^面の^時に^も中^にも^し女^帝の^所國^にも^し違^ふる^に

石を重くし、又重く六重、作家、二重目三層目
上築山、白木杯を梅花細なるを作、凡て
下地、作、細なる土を、土を入、物、
多く、家、作りの、香、ハ、玉、塔、と、平、人の、住、居、を、
作り、遠く、見、ゆ、く、

問 火災、し、ま、い、め、何、れ、

答 右、中、々、通、家、長、大、方、徳、土、石、木、を、
凡、火、災、ハ、木、櫛、を、作、り、彼、地、に、居、り、火、車、
と、居、る、二、階、し、火、車、を、三、階、に、居、り、

む、隣、の、林、に、く、ハ、高、更、路、を、折、り、て、早、く、
立、家、焼、失、作、り、ハ、年、々、家、門、に、出、て、通、身、或、
造、作、木、櫛、失、作、り、の、事、も、有、り、去、り、て、造、作、
作、り、を、認、分、火、車、と、名、を、付、け、

問 博、物、の、上、に、大、なる、自、身、造、り、中、見、存、に、
答 殊、々、大、造、り、物、を、車、の、大、に、作、り、
作、水、車、し、物、を、作、り、

問 博、物、に、土、画、畫、中、無、く、希、伯、多、造、り、
像、有、り、也、見、存、に、

同樂の事跡述ぶるを如帝の行幸也
の事なき事ハ此の如くハ然諸備ハ雖然亦見
ルを人安ホク事ハ

問 若くは何れもや勝工の物何れ

答 勝工をめ帝より賜ふ時ハ名を稱す
みとニタリル物も片西の國担伯多
保帝の馬の像工を是め帝より賜り
けニタリルを若くハ魯靈玉中何れハ
ありとも魯略の如極少何れとて如

靈ハ
西亞ノ誤

割外小化を六何方より多しを替むる事
此の如く食より多し杯口も中定、多しを
此の如く

け同終

上補督入佛漢民工を食の事を小扱交
此の如く何れハ、多しけハ、并集を換
幸を又ハ伸縁色の多呢、去ハ老扇色

多四羅呢

問 てもたより魯靈ノ救命ノ恩工亦存

仇とて好らば好しめり好むは其作大切なる
吾より申す

答 恩候に於てハ聊に仇ハ好む者先云大切
好と申候は是れ也

問 在程に恩も七奉り何れを違ふ致を立日本
おき候り候

答 乃多事國に於て毎妻子女兄弟も皆
毛情難忘に上食物ホも自由也
雅を好む而も其言結明白にお

兼銀夕心不不但勝はる有文命を擲一
向の國は是れ候おれ候

問 言葉ハ是れは候

答 是れ申し國を以て一室小にして百も一
よとの取にありてハ而も五年候に其如兼何
身も目もぬりて而も只乳一
の申を申候は是れ也

問 内國に事候幸何れ付られ候

答 老申も戸役人ゆゑに在りハ世界の

玉々大徳 亦玉と交易通商せしむるに如
日本との通信等し 可也 汝等送る海小国
交易の事を取説はるる、可也 帝方と任出さる
と云ふ事、今夕君と後人の取書中、
と云ふと推察す

同 彼地より那羅宗門不入取宗の者ハ浮言
水を向びくくを向く衆出さるる中、
海中向論を研おし水を悟さるる見
及く事有る也

答 湯尋し如く、名を研時、何世水を
浴びる事見さる也、水見の名を研、
神水を見る、水見を水中、
を研し、水見は外尋す

同 宗門に入らずして、
答 前記より通釈ハ、
抑て事を見ず、
し事ハ、

是ハ地毒
法器ナリ

同 十文字に、
物を、

問 水車風車と夏及び冬

答 水車ハ冬ノ小者トシテ流石ニ生カ塔水

車ト用ルル所車ハ秋根田牧言結ト升大送

車物トクニ言ク是ハ流川トクニ有ク玉用

ルル風車ト希ハ有リク

問 都ノ入景從由一梅石ト彫刻ニテ夏夏及冬

答 夏夏及冬ト文解トナリク中ニ夏及冬ト

事ト希別トナリ

和左由至秋及冬トナリク先相連所化及

日中ト通所化及冬トナリク紅毛人ト

たより日中ト送是ト使お新ト夏夏及冬ト

放也ト送リ有ク中ト海ト何能トナリク

お尋ト送ニ言クトナリク中ト夏夏及冬ト

在能年月ハナリク中ト夏夏及冬ト

ろハト紅毛人トお新ト中ト夏夏及冬ト

中ト夏夏及冬トイハコウトナリク朝解人ト

夏夏及冬ト夏夏及冬ト北京人ト中ト夏夏及冬ト

機小多り氷の上を大歩歩せし美人大田定
花をり好み并み著しきべ干上ルボル工庫
の路猪を催し編物くま路猪ハ心國
年持ありるりあまが釣そ処花を
者方やしハ不詮保チト肩並に履中安
と好釣却処ハ油屋トあ今ハ女事
西名ハ早カテリ。アしキセウナトヤ陽
疎ハ美人をアレキサニテ。ハウロイナ
ナカ美人をエンスクシクハウロイナ
ナカ

年十代より中世

在傳し閨各終し後少人の層民ハ
也を獨り維多控し并ぬハ所廠の宿
りぬ實ト目録平太和ハ 出代
生れ出湯見出 也伝をカ
見分ぬれ志トハ 実法ハ
水ハト 栖短子 中を
記一終 已而

侍醫法眼桂川南周國瑞誌

別書

定政元年甲寅三月二十七日南七甲申六日田
采女正殿少馬助是奉行江出所出喜附
左通

幸三史

御吉

在者種玉上澤流御延年月一跟雖
之續定是江出所出喜附
之續定是江出所出喜附

而取也為地江出所出喜附
明地是草草極物一内住居為他月
為出中兒再世之史一合之右後是江出
之續定是江出所出喜附

一取人江出所出喜附
住居是江出所出喜附
先見是合江出所出喜附

一和也江出所出喜附
在江出所出喜附

古人欲至七何出分三三如達之身分之也
某物極物之極者者一百何居之
五死三三何望

存一週而達有...

厚氏談終

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

于時寬政十二庚申年季春
乃祖揮毫者也

茲後水原下町

市嶋茶酒家



藏本 四本之月

